

「21世紀の橋を渡って、おもうこと」

Motohashi Seiichi

- 本橋成一氏をお迎えして

第19回AKIHIKOの会開催



懇談中の本橋氏

イラク戦争、自衛隊派遣。日の丸をつけた装甲車に迷彩服の自衛隊員が他国・国境をこえていく。そんな無防備な画像に向き合つと、戦争が加速していくようにみえます。また、戦争の報道が可能な時代の戦争報道写真のようにはみえたりしません。

さて、ベトナム戦争報道から四〇年、岡村昭彦が亡くなって一九九年になる今年のAKIHIKOの会は写真家の本橋成一さんをお招きしての映画と講演の集いとして行われました。

本橋さんには一九六〇年代の半ば、戦争報道写真家岡村昭彦のアシスタントをしたという経験があります。岡村昭彦の影響が大であったことは、

没後の追悼文(『社会新報』一九八五・五・一四参照)からも伺えます。そして、現在、「岡村さんの仕事は、(批判もあるけど)写真家としてはもつと評価されていたとおもう」と今回の講演を快く引き受けていただきました。

本橋さんといえば、近年ではチエルノブイリ原発の被災地ベラルーシ取材から、汚染地で暮らす人々を写真(『無限抱擁』など)や、映画(『ナージャの村』、『アレクセイと泉』)を通して発表され国内外で高い評価をえられました。また、昨年はイラク戦争直前のイラク国民の暮らしの写真(『イラクの橋を渡って』)でも話題になりました。

今回は、感銘深い映画作品『ナージャの村』の上映とあわせて、原発反対! 反戦! などと声高に叫ぶのではなく、静かに語りかける本橋成一さんのお話に耳を傾けました。

本橋さんは講演の中で、「僕たちはいろんなものの豊かさを追いかけて大切なものをなくしてしまつた、その大切なものがあの大地にはうじゃうじやある。それを映像の中から見たいと思ふんです」と語っています。

質疑応答も例年になく活発で大いに盛り上がり、著書・写真集・ビデオ作品もたくさん購入していただきました。

第二部懇親会では、本橋さんを囲んでいつもの通り楽しい会となり、南は長崎、北は北海道、さらに静岡、愛知、岐阜、長野、大阪、奈良、兵庫と遠方からの参加があり、今回も交流と出合いの会となりました。参加者六九名。

僕達は豊かさを追いかけて大切なものをなくしてしまつた。

本橋成一

映画『ナー ज्याの村』は一時間五七分ですが、二時間近く、椅子も映画館と違いますし、ホールと違いますので、さぞかし辛かつただろうと思います。

この映画、ときどき「ビデオでやっていいですか」と言われるんですが、「できればフィルムで観てください」とお願いしているんです。

真つ暗闇にいと自分の世界がポツと生まれて、映像・イメージ・シヨンの世界が膨らみます。だから僕は映画は真つ暗闇で、スクリーンで観てもらふというのが大好きです。本日は映画で見ていただきありがとうございます。

まずは、今日ここに来て、何かひとつ吹っ切れたという気がしています。実を言いますと岡村昭彦さんとの出会いは、僕が筑豊文庫の上野英信さんのところに通いだしたころ、ちょうど岡村さんが上野さんのところで『続南ウエトナム戦争従軍記』を書きはじめたころです。筑豊

文庫でたびたびお会いしているうちに、僕は彼のアシスタントをするようになりました。

彼の下で一緒にやった三年間は、今、僕がやっている映像の仕事も含めて、いろんな意味で大変ないい機会だったと思うているんです。

ただ岡村さんが亡くなったとき、僕は彼から離れていました。彼にはぶつけてみたいことが山ほどありました。「岡村さん、岡村さんはあの時ああ言ったけど、なによ」とか、そういうチャンスがくるのを待っていたんです。そうしたら勝手に亡くなってしまったものですから、投げつけるのが無くなったみたいで、岡村昭彦と一緒にいた時代は、そつと隠そう、なるべく黙ってしようとしてきたわけです。

最初に僕が外国に行ったのも彼と一緒にでした。彼は解放戦線のサイゴン（今のホーチミン市）入城のときの撮影を綿密な計画を立ててねらっていたのですが、ビザがおりないので、僕がタイから指示を受けてサイゴンに入って彼の計画の下に約一週間ぐらいあちこち連絡していました。従軍するとか、サイゴンで写真を撮ったということは僕にはまつたくないんです。その時代の話をするときがありません。今日岡村さんの弟の春彦さんにお会いしたり、娘の純子さんとお会いしたりして、いろんな想い出が僕の

中で渦巻いています。

*

今回の機会はいくつかのきっかけが重なって実現しました。この会の世話人の一人米沢慧さんのホスピスの本で甲府市のふじ内科クリニクの内藤いづみさんと共著（『いのちに寄りそつて』）がありますが、僕は違うことで内藤さんとお会いしたり、一緒に食事したりすることがあったのです。ある日、岡村昭彦著作集を彼女が持っているんですね。先ほど話したように、なるべく離れていようと思っていた岡村さんの本を彼女が持っているの、「エッ」という話になったのです。

もう一つは上野英信さんが亡くなられたあと、夫人の上野晴子さんがやはりがんにかかり、最後はホスピスで亡くなった。その教科書というか、上野さんをホスピスへつなげた本が、岡村昭彦さんの本だったんですね。

そんなことが重なって、米沢さんからお話があったとき、僕もこの会をちゃんと覗いてみないといけないなと思い、今日は来させていただきました。もう少し僕も勉強して、岡村さんの別の顔の、その辺の話もできたらいいなあ、と思っていたのですが、そこまで到達しませんでした。今後の宿題だろうと思っています。



「彼とのかかわりって何だったんだろうな」と思ったときに、ふと僕は、もう一度、「岡村昭彦がやってきた写真って、なんだろう」と考えてみたのです。

ひとつには、たとえばロバート・キャパに憧れた時代というのがあったし、その延長線で僕は岡村昭彦に憧れていたし、だけど今は、僕は戦争写真というか、ロバート・キャパもあんまり好きじゃなくなっちゃっている。

この間、ある写真の賞の選考委員会というのが開かれて、僕もその選考委員の一人でした。

たくさん賞を決めたあと、対象にならなかった作品の中から特別賞を拾っていくのですが、あるファッション写真家の有名な先生が「ところで特別賞は一ノ瀬泰造さんにあげましようよ」という話をしたんです。それが「なぜか」というと、彼の教えている学校で一ノ瀬泰造に憧れている生徒がたくさんいるので、励みになるから、という話だった。3対4であげましようという話になったのですが、僕は気になったので「ちょっと待ってください。一ノ瀬泰造の写真は別にして、憧れているから賞をあげるといのは、どうでしょうか」というと、それが4対3になって、結局その賞は取りやめになりました。戦争がなければ戦争写真家はいないわけですから、戦争写真をもう一度ちゃんと「どういものだろうか」と考えてみるといいなあと思います。

今日の映画の中でいうと、僕は報道写真家ではないものですから、チエルノブイリの事故が八六年に起って、そのとき僕はいろんなことを言いたかったのですが、なかなかそれを映像として写し撮れなかったのです。

僕がチエルノブイリに最初に行ったのは事故から五年後、松本にある「チエルノブイリ連帯基金」という信州大学の医学部の先生達と一緒に

にやっているグループですが、そこが九一年に立ち上げたとき、僕は誘われてボランティアで参加したのです。四号炉を案内されたり、病院に子ども達を見舞ったり、そういう写真を撮ってパンフレットとか、ニューズレターとかに使うということだったのでわりかし気易く行っただけです。しかし段々何か、僕の仕事はいつたんだろうって思えてきたんです。たとえば四号炉の前に立ち、医者が測定器のボタンを入れるとピーピーピー、凄いい音が鳴るんですよ。「なんだ！なんだ！」とみんな集まってくと、なんと六〇〇倍もの放射能だということです。その中で僕は何の写真を撮ったらいいんだろうって思えてきたんです。暑くも冷たくも匂いもないし、ヒリヒリするわけでもないし、そういう中で僕の仕事はいつたんだろうって思ったり、それから病院で子ども達に出会うと、カメラが向けられない、どうしてこの子たちがこういう状況になってしまっただろうかというのを僕はすごく思って、おじさんたちが豊かになろうって思ったそのつけが、全部この子ども達にまわってしまったらと気がつく、「ごめんなさい」ではないけれど、そこそこしか写真は撮れませんでした。最後に連れて行ってもらったのが、今日の映画の題になっているチエチエルスク地方、

今、ペラルーシ共和国という国になっているところ
です。そのコメリ地区という、あの事故の
六割から七割の汚染物質が降り注いだ大地なん
です。僕が想像していたのは荒涼たる大地、そ
して不幸な人々、それらをイメージして行っ
たのですが、実際にそこで感じたのは「あっ、切
り口が違う、いのちの問題だ」、そう思ったん
ですね。「いのち」という視点から見れば、そこ
から核を覗くことができるのです。そのことに
気づいたら写真がたくさん撮れるようになりま
した。通い続けて一三年になるんですが、二度
と行くまいと思っていた大地へ三十数回通うこと
になってしまったんです。

今日の映画を「チエルノブイリの映画です」
というふうで紹介されると、核問題を扱ってい
る映画だと期待して見ていらした方は「何
だ！」という話になり、またその逆もあります。
この映画、それからそのあとの『アレクセイ
と泉』に込められたものは、この大地が、僕達
がこの一〇〇年、この五〇年豊かさを求めて、
いるんなものを作り出してきた私たちが、皮肉
なことに電気をほとんど使っていない彼等が被害
者になり、彼等が犠牲者になっているというこ
とです。その彼等の悲惨さを写し取るよりも、
僕達がいるんなもの豊かさを追いかけて大切

なものもなくしてしまった、その大切なものが、
彼等の世界というか、あの大地にはうじゃうじ
やあるというふうには僕は思って、それを映像か
ら見て欲しいと思うんです。

この「いのちが見える」というように僕はよ
く言うんですが、たとえばチャイコスカヤばあ
さんが山羊のシロをとつても可愛がっている。映
画を撮影しだすと、チャイコスカヤばあさんを
フレームの中に入れるとき必ず白い山羊がフレ
ームの中に入ってくるんですね。撮影の一瀬さ
んは「またシロが入ってきちゃったな」と言
うぐらいシロはおばあさんとくっついてい
るわけだけど、映画の中で気が付かれた方があ
ると思うんですが、シロが死んだときおばあち
ゃんの嘆きというのはすごいわけです。

実をいいますとあの映画は春夏秋冬、約一ヶ
月ずつロケをしたんですが、その冬のロケ、一
二月の初めだと思つたのですが、ちょうど行っ
たときにチャイコスカヤばあさんが僕等を捕ま
えて「山羊が死んだ！ シロが死んだ！ 私を
残して死んだ！」と、そのことしか言わないん
です。つまりおばあさんにカメラを向けて撮り
だすとボソボソボソ「シロが死んだ！ 私
を残して死んだ！」と言って。それでつきり、
これだけ仲が良かったんだから悲しいんだと思

つていたら、実を言うと、息子が外に出してお
いたら犬が全部食べてしまった。そのことがチャ
イコスカヤばあさんは悔しくてしょうがなかつ
たのです。つまり肉を食へられなかった、食へて
あげられなかったことが、おばあさんにとって
悔しくてしょうがなかつたわけです。そのこと
からも、僕等は「いのち」をいただいで生きて
いることを改めて思ったことでした。

それから豚を殺すシーンがありますね。ケル
チン夫妻というのはとても豚をうまく飼うん
です。日本のように脂身をなるべく少なくとい
うことではなくて、なるべく脂身を多くついた豚
がいいそうで、いかに脂身をたくさんつける豚
をつくるか。「どうしてそんなにうまく飼うの」
と聞くと、必ず「かわいがることよ」と言うん
ですね。かわいがること、だから秋になるとド
ングリを採ってきてやるわ、小麦粉をやるわ、
ジャガイモをたくさんやるわ、豚の表情はよく
わからないけど、豚もともかくうれしそうに食
べるわけです。秋になるとブラッシングを日に
何回もするわけです。そのシーンを撮っていた
ら、おばあちゃんが小さい声で「これだけかわ
いがってるんだから、この豚の肉は美味しいよ」
というんですね。その「これだけかわいがってい
るから美味しい」という発想がすごい。だけどよ

く考えてみると、ついこの間まで僕達もそういう暮らしをしていたんじゃないかな。

僕は敗戦後焼け跡で育った時代の人間です。焼け跡でまず親父が飼いだしたのが鶏でした。東京の中野です。それは決して珍しいことではありませんでした。ある雑誌の統計を見て驚いたんですが、昭和二五年当時日本中で自家製の卵を生産していた家庭は二三%だそうです。だから四軒に一軒は自家製卵を食べていたことになります。それはもう我が家にとっては大変な蛋白源だったし、卵を産まなくなった鶏はつぶ



して肉にするわけですけど、わが家にも二〇羽前後飼ってまして、僕は小学校から帰ると必ず餌当番をやらされました。家の親父はそういうことが大好きですから、次から次へとつま具合にひよこを孵して飼っていたわけだけれど。

家の実家は本屋なんです。東中野ですーっと本屋をやって、ともかく鶏が小屋から出て本の上にウンコをしちゃうのが、一番わが家で大騒ぎすることでした。僕が戸を閉め忘れて鶏が逃げ出して、店の中めちゃくちゃになったことも何回かあって、よく叱られたものです。そういう時代だったんです。

僕は雌鳥に、小学校の同級生の女の子の名前を一羽ずつ付けて、雄鶏は校長先生とか教頭先生みたいな、威張っている先生の名前を付けたりしてて、そうすると卵を産まなくなった雌鳥が順番に殺されていくわけです。僕はその日がものすごく楽しみでして、というのはい今みたくケンタッキー・フライドチキンがあるわけがないし、本当に月一度の鶏肉の時間がごちそうだったのです。

僕が親父に今でもありがたいと思っていることは、僕の帰りを待ってから鶏をつぶしたという事です。毛を取って、解体するのを僕に教えようということもあつたのだろう。でもやっ

ぱりずーと付き合っていた鶏が殺されるわけですから何となくショックというか、同級生の女の子の顔が思い浮かぶわけではないのだけど。

その晩は先ほど話したように一ヶ月ぶりのごちそうになるわけで、お袋は必ず手羽先を焼いて僕に特別に出してくれました。それがもう楽しみで、楽しみで、でもその手羽先にちょっとでも肉を残すと、親父が「成一がかわいがつていた何子ちゃんだろ。しっかりお食べ」って。だから生きている鶏と肉になった鶏が、ちゃんと両方が見えている時代だったんですね。

そういう時代というのはやっぱり僕はとってはいいい時代で、「いのち」が見えていた時代だと思ふ。いまや殆ど見えないですよ。それはやっぱりものが豊かになった分、それが見えなくなったと思ふんです。

三〇〇年の間に地球の人口は一〇倍になったそうですね。この間本を読んでいて「はっ」と思ったのは「そうか産業革命だろう」と思ったのです。たとえば蒸気ポンプと石炭の組み合わせというの、人類の文明文化の大躍進を遂げた一因だと思ふのですが、水は高いところから低いところへ流れるのは当たり前だけれど、それを低いところから高いところへ流してしまつた産業革命というか、人間の知恵というか、それ

で世界中、地球のバランスを崩してしまった。だから産業革命はよくなかったんではないか、というと極端ですが、つまりそういうことで人間は他の生き物たちを追いやり、殺して、人間の数だけ増えていったわけですから、もっと謙虚に生きていかなければいけないと思うんです。なかなか謙虚に生きられなくて……。

*

話が飛ぶんですが、核というのは使い方が悪かったからとか、平和利用ならいいとか、管理をちゃんとして人類の発展のためとか、いろいろと都合のいいように言うのですが、そもそも人間がつくった核そのものが一番よくない、存在自身がよくないと思っています。バンドラの箱を開けてしまった人間というのは、これからどういふふうの後始末をしていくんだろうと、とって不安です。

原子力を開発して何がいいことあったんだろうか。そのために何が豊かになったのか。そういうのを僕はチェルノブイリの一連の仕事をしながら、いつも考えてました。それは産業革命からずーと続く人類の発展進歩の一環なんだけど、人間がこれ以上いろんなものを作り出さない方がいいんじゃないか。そのほか僕はチェルノブイリの村々を歩きだして、「いのち」をいじ

りだした人間というのにも、もうそろそろ神様は怒り出すのではないかと思うんですね。何か三三億年ですか、人間でも猿でもミミズでも、「いのち」のずーと繰り返して生きてきたわけですけど、だからキリンの首が長いのはそれなの理由があるわけで、それを人間の都合で短くしたりもつと長くするというのは大変な冒険だと思っんです。

この間もニューズ見ていたら、人間の肝臓取替え用の豚も、いまや開発されていうという話があつていたのですが、僕は「それは間違っているんじゃないか」って思います。まあ人間同士が臓器を交換するのは、それもよくはわからないけど、たとえば僕の肝臓は三三億年の歴史の中で僕用に作られたものなんです。豚のピー子ちゃんだとすると、ピー子ちゃんの肝臓は三三億年かけてピー子ちゃん用に作られた肝臓だと思っんです。ニラレバ炒めにして食べて元気になることは神様も許してくれると思っんです。それを肝臓の病気を治そうと思っ僕がピー子ちゃんの生の肝臓をもらうというのはやっぱり人間の思い上がりではないかと思っんです。そういうことばかりでなくて、いま人間の都合で勝手にいのちを創り出していることがたくさんあるわけで、そうなってくると神様はど

こかで怒るんじゃないか。人間はいのちあるものに対してちゃんと自覚して生きていくということをお忘れないようにというのが、その辺が多分岡村さんの言いたかつたことだろうとなんとなく思っんです。

*

次のもう一つの映画、『アレクセイと泉』という映画ですが、そのひとつのテーマは水なんです。今日取りあげた村から約七〇キロ離れているもう一つの汚染された村の話です。そこはかつて六〇〇人ぐらいの人口のあつた村なんです。そこに五五人とアレクセイという青年が住んでいるんです。

そこに泉が湧いているんですが、それが何度測つても、何度保健局の人に頼んで測つても、僕等が持ち返って測つても放射能は検出されなんでしょうね。「すごいなー」と思っんですけども、村の人たちは平気で、「一〇〇年前の水だからあたりまえだよ」と言っただけ……。 ……

その出て行かないお年寄りたちに、「どうして出て行かないの」と質問をすると、必ず返ってくるのは「この村を出てたら、いのちをお返しするときに、この村にお水をお返しできないからなんだよ」と言っんです。最初僕はどういうことかというのをピンと来なかつたんですが、



水を借りている、お返しするというのがすごいなというのがだんだんわかりだしてきて、そういわれてみれば人間の体七割水で出来ているわけですから、体重五〇キロの方は五×七＝三五リッター、六〇キロで六×七＝四二リッター、僕だったら七×七＝四九リッター持っているわけです。それを借りているというふうに言い切る、「すごいなー」と思ったんです。

そうしたら去年から一昨年にかけて、水のことがあちこちで話題になっていて、テレビを見ていると、私たち人間が使える、生きもの達が

使える淡水、テレビでは使えると言っていて、僕もずっとそう言っていたんだけど、そのおばあちゃん達の話聞いて、借りれる水というのはたった〇・〇二%しかないんだそうです。海水が九七%、その〇・〇二%をみんな生きもの達は借りているわけですよ。だからまあ循環しながら借りているわけだけど、そういう借りているものを返すという、返さなきゃ借りられないわけだから、誰かがね。

今、日本のスーパーマーケットに行くとき世界のお水が売っています。あそここの村に行つてじじばば達と話していると、「売っているのは変ですよ」という話になるんです。本来なら空気とか水とかは売買するものではないわけですよ。ちよつとしか水がないところはちよつとしか生きもの達は住めないし、食べ物がたくさんあるところではたくさん住める。つまり空気とか水とか、そして食料だって本来ならば売買すべきものではない。僕達が「いのち」をお返しするときにはたいへんだらうなと思うんです。

蛇口をひねれば水が出てくる、スイッチひねれば電気がつく、そういう生活はより謙虚であるべきだと思うのですが、どうも便利になればなるだけ人間、横着になるわけで、でもそんな急げは許されなくなるのではないかと。二〇二五

年には世界の人口が八〇億になるという予想。そうするといくら水を節約したって、八〇億、僕計算をやったことないんですが、体重の七〇%の計算でいくと、水はすべて人間が独占してしまつわけですよ。当然アメリカ人みたいなお金持ちばかりじゃないから、アフリカとかアジアでは、水がなくて亡くなっていく人たちが大勢出てくるわけですね。もう、そこまで来ているわけだから、相撲取りとかプロレスラーとかいうのは仕事で仕方ないが、なまけて一〇〇キロになる人はどこかで高い税金をとるとか、消えてもらうというわけにはいかないけれど、仮に一〇〇キロのひと一人に消えてもらえば、五〇キロのアジア人二人が生き延びるわけですから、だんだんそういうことも考えなくてはならないと、考えてしまつんですが。

ともかく二一世紀に入つてもう一度きちんといのちを見直さないとどんどん住み心地が悪くなって、結局、この地球にとつて人間が消えてもらうのが一番安心できるというふうにならないよう、もう一度「いのち」を考えないといけないんだらうなあ、と僕は思います。

何だかわけが分らなくなってきましたが、話したいことはたくさんあります。けれど僕、岡村昭彦さんと付き合つて一番なんかいるんな

ことで楽しかったのは、靴とかズボンとかカバンとか、本当に凝りに凝っているんなものをつくるんですよ。そういうプロの職人でもあったんだろなあと思うし、そういう話はまたあとでゆっくりしましょう。

*

何かご質問とか、そういうのに切り替えましようか。映画のことも何でも結構ですが、今日は長倉さんも来てるし、ほくなんかよりよっぽどちゃんと写真をやってるしやるし。僕、長倉さんの写真大好きだし、長倉さんに質問とか。
長倉洋海 これ仮定で申し訳ないんですが、もし岡村さんが今も元気だったら、何やってるかな、こんな感じになっているかなあ、あのころのちよつとこわいというか、会ったときに「がつんとへこまされるといふか、本橋さんの独特の想いを込めて想像していただけたら……」。

本橋 そうですね。写真の方しか僕はわからないのですが、多分今のイラクの報道とか、そういうことに関しては多分うんと文句言っていたでしょうね。すごくね。あとはなんでしょうね。僕よりか米沢さん、どうでしょう。

米沢 今日のお話の中で、本橋さんが岡村昭彦の問題とつなげられたというところで言いますと、結局「いのち」という問題を出されたんで

すね。これは私も岡村昭彦について報道写真、あるいは戦争写真という問題、あるいは少なくとも私達がこういう席を設けて、亡くなっただけから二〇年になるうとしておりますが、いまだにこういうふうな形でみなさんにおいていただけという、その岡村昭彦という非常に独特な個性と、それからもうひとつは思想というものが無い限りは、亡くなって二一世紀まで届かないといふふうに思っています。

ジャーナリストとしてもとりあえずいろいろと著作等残したわけです。そして最も華々しいということではありますと、ベトナム戦争を通しての、いわゆる戦争報道です。あの時代の流れの中でいいますと、ジャーナリズムの中ではやはり重要だと、間違いなく思いました。

だけど二一世紀に橋を架けて岡村昭彦を残す視点はどこにあるだろう、と僕は思ったんです。そうしましたら彼は結局六〇年代にベトナム戦争で手に入れたモチーフというのはやはり「いのち」、生命という問題だったということと、それに関連して医療というものが大きく変わっていく、そして医療というのは二一世紀は医師ではなく看護師が主役になっていく、そういう医療のあり方であればいけないということと、医学書院の『看護教育』という雑誌に二年あま

りかけてほとんど知られない形で発表し続けたのが「ホスピスへの遠い道」というタイトルのルポルタージュだったんですね。

そのルポルタージュという、独特の方法というものが何とか岡村昭彦というものを残すところだろうと、私は勝手に思っています、その辺の延長上で、私もそれに関連した著作やまたそういう活動に一部関わっているんですけども、そこで二一世紀に橋渡しするところでいいますと、岡村昭彦の著作集の第六巻ですけど、その最後の著作「ホスピスへの遠い道」。あえてこれは本人にはお墓の前で事情を言っていることなんです、私の方で、彼の主要なものを補いながら、『定本ホスピスへの遠い道』（春秋社）という形で残しました。

そうしたところでいいますと、今ご指摘のあったように、とりあえず戦争報道とか写真という主題は、結果的にはまだ残っていると思いますが、とりあえず何か橋渡しを出来るのは、そのところではないかと思えました。それをいみじくも今日、本橋さんの方でチエルノブイリという、そういう原発の問題あるいは環境とか汚染とか、誰もがそういう視点からみんな入っていったところを、まったく逆なところ、つまり「いのち」というところに触れてお仕事をされている



写真は左から細野容子、岡部米子、藤井皆子、川中洋子さん

たというところに、今日のお話を聞いて私も大変意を強くして、どこかで岡村昭彦のそういうところを掬い取ってもらっていたんだなあ、そんな感想があります。

*

質問 その岡村さんのホスピスの話とあなたが岡村さんのアシスタントをやっていた時代に交わした言葉というか、話とこののを、何か思い出すことありませんか。

本橋 そうですね。ないこともないけれど、そういうことがつながったかどうかは全然確認で

きないですが、だけとただ「いのち」、それはすごい気をつけていましたね。だから「死んだ報道カメラマンはばかだ。ばかだ」と言っていました。そのことはすごく僕は印象に残っています。「だめだよ、あんなんでは！ 死んではお終いじゃないか！」。死ぬと何となく物語ができて、一人歩きするというのは、彼自身は嫌っていたと思っただけですね。写真家は生きていて仕事が出るんであって、死んでドラマになったり映画になったり、本になったり。「感動スベシヤル・戦場カメラマン愛と死」と、こういうふうになっちゃうと本人だって絶対いやだと思っただよ。ただどやっぱりこうなってしまうんですよね。岡村昭彦は、こういうことが一番嫌だったと思いますよ。

質問 先ほど彼等は電気を使っていないにもかかわらず犠牲者になった。私たちが求めている豊かさがその村にはうじゃうじゃあるとおっしゃったのですが、その村から何が見えてきたのでしょうか。

本橋 映画は観てくださいましたよね。つまり「よけいなものがない方が生活は豊かになる」というのが僕のずっと想いでして、たとえば時間の流れとか、そういうものもひとつだと思っ

向こうに行つて映画撮ると時間で約束できないというのがあって、それを不便とするか豊かとするかの違いだと思っただけ。東京の時間を持っていったら絶対向こうでは撮影はできないだろうなあと思う。それはあそこ村ばつかりじゃなくて、みんないるんなところも同じ。たとえば「明日午後からなにをするんですか」って聞くんです。そうすると「シャガイモの収穫の準備をする」と。それは絶対撮りたいから僕はすぐ「何時からですか」って聞いてしまう。そうすると「ばあさんが朝、森にきのこを採りに行くから、帰ってからだよ」と。またそこで僕は「何時ごろ帰ってくるんですか」。するとじいさんが「うちのばあさん欲張りだから籠いっぱいにならないと帰ってこないからわからん」と叱られるんですよ。

そういうことで、映画のスタッフ八人は午後からずっと畑で待っているわけです。最初はあせっていたんだけど、そういうのが結構だんだんよくなってきます。だけど多分テレビの仕事で行ったら絶対そういうことは許されなかつただろうし、そういう関わり方、彼等の豊かさというか時間に対する、そういうものも含めて、です。

また食べ物 genuinely 豊かだと思っつのは、自給

率九九・何%なんですよ。あれはすごいことです。ベラルーシってすごいインフレでして、この映画には出てきませんが、次の映画になると一〇ドル両替するとこんな札束になってくわけですよ。あの年寄り達はみんな年金生活者ですから、二五〇〇円ぐらいずつ一人もらっているわけですから、けっこうもらっているわけ。ただ目減りするわけですよ、とんとん。

だから誰もお金を信じていないわけ。だから年金をもらうとすぐ使うか、みんな村から出ていっている息子達に全部渡しちゃうわけ。だからぜんぜん貯金がないわけですよ。だからもしバブルが弾けたとしても何しても怖いものはないのです。それがどうしてできるかといったら自給自足だからですよ。そうなると私たちがほしいなんだろう。これでそれこそ一銭もお金持たなければ、蓄えてない方もあるでしょうが、最小限蓄えてないと生活できない。そうするとお金という金融を誰かにコントロールされているわけですからね。だからそういう豊かさとか、いろいろとある。

*

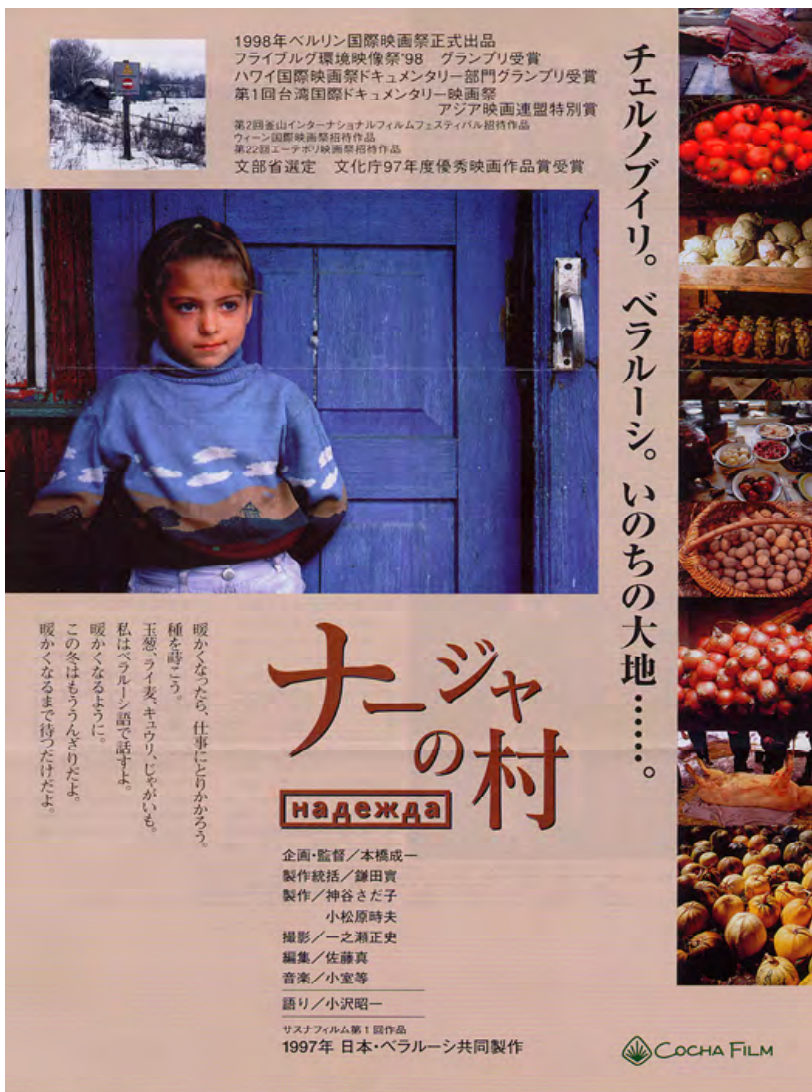
質問 被写体になってくださった方たちと今はどんな形で関っていらしゃいますか。私は定時制高校で働いていたときにベトナムの青年がいま

して、偶然彼の仲人をさせてもらったんですが、ついでに二週間ほど前、彼は帰国しました。本橋さんは今はどんな形でチエルノブイリの人たちと関っておられるのですか。こんな時代だからなおさらどんな関り方ができるのかを知りたいのです。

本橋 まあよく関わっているほうだと思います。まず報告なんですけど今日の映画ですね、クルチン夫婦も亡くなっています。それからチャイコスカヤばあさんも本当にヤギと同じ死に方なんです。ところで大腿骨骨折で寝込んで一ヶ月半病院に入って亡くなって、ニコライという天国の話をした人は元気です。それからボクサーはま

1998年ベルリン国際映画祭正式出品
 フライブルグ環境映像祭'98 グランプリ受賞
 ハワイ国際映画祭ドキュメンタリー部門グランプリ受賞
 第1回台湾国際ドキュメンタリー映画祭
 アジア映画連盟特別賞
 第2回釜山インターナショナルフィルムフェスティバル招待作品
 ワン・アジア国際映画祭招待作品
 第22回ユーロホリ映画祭招待作品
 文部省選定 文化庁97年度優秀映画作品賞受賞

チエルノブイリ。ベラルーシ。いのちの大地……。




ジャの村

Надежда

企画・監督／本橋成一
 製作統括／鎌田實
 製作／神谷さだ子
 小松原時夫
 撮影／一之瀬正史
 編集／佐藤真
 音楽／小室等
 語り／小沢昭一

サスナフィルム第1回作品
 1997年 日本・ベラルーシ共同製作



た警察に捕まっていた会えませんでした。去年の夏・秋に訪ねていったんです。毎年行くたびに二回ぐらいは顔出しているんです。それからチャイコスカヤの息子さんの方は、彼が一番早く亡くなったんだけど、映画を撮っていると、きから咳きをして、肺がんで翌年亡くなりました。だからあの村には新しく何処かから引越してきて住み込んだ夫婦がいるそうですが、今三人ですか、三家族住んでる。僕も写真撮った



写真左から米沢慧氏、廣田尚久氏、本橋成一氏

から終わりというわけにはなかなかいかないタイプでして、「長倉さんもそうだよ。付き合いがすごく古いよね」。いっぺん訪ねて行くとなるとね、いい悪いは別として気になるし、付き合っています。ナージャはもうすっかり大人になってしまつて、みんなイメージの中だけにしまつておいて会わない方がいい。お姉ちゃん二人にはもう三人ずつ子供がいます。お父さんは相変わらずです。

彼等はどうしても映画好きです。やっぱりロシアというか旧ロシアは、フィルムで年間二〇〇何本つくって、国の政策で隔々まで映画を見せ

ていました。だから最初は仲良く撮れたんだけど、カメラが回りだすと余計なことを言うし、何か自分が俳優になつたつもりでいるんですね。僕もはたしてこれでドキュメンタリーができるんだらうかと心配しました。途中で止めるわけにいかないし、最初の五日目ぐらいまで、チャイコさんが毎回帽子が違うんです。それで撮影の一瀬が「本橋さん、ちょっと変。何か毎回違うよ」と。ドキュメンタリーでも昨日歩いていたと、今日畑で働いたのとつなげたいと思うシーンもあるわけで、それではまずいわけですよ。それで彼の家に行つたら机いっぱい山盛りになつた帽子全部出して、今日もし撮られたらどの帽子にしようって、楽しみにしていたようです。

それからだれもなくなったナージャの家を撮りに行くことと思つたら、お父さんがいたんですよね。家財道具もみんなないから、「これは面白い」と思ってカメラが回りだしたら、歌は歌い出すは、嘆くは……。あとで考えてみたらカメラが入らなかつたらあんなに歌わなかつたわけだし、でも「それでもいいか」と思って、あの映画もベルリン映画の招待作品になつただけど、そこで一番ほめられたのが、ドキュメンタリーでこういう村の人たちと一緒になつて

つくつたのは、これまでにない新しい形のドキュメンタリーだつてね、すごく褒められて、僕がやるうとしてやったのではないのに……。

何か関ることというのが、関ることが楽しいわけで、その辺も何か岡村昭彦流なのかなと、ちよつとは自負しています。

米沢 今日はどうもありがとうございました。

(文責 戸田)

もとはし・せいいち 写真家 映画監督

一九四〇年東京生まれ。六八年「炭坑ヤマ」で第五回太陽賞受賞。九一年からチエルノイリ原発と、その周辺の被災地、汚染地で暮らす人々を写真 映画に写し録る。

九五年「無限抱擁」で日本写真協会年度賞、写真の会賞を受賞。

九八年「ナージャの村」で第一七回土門拳賞受賞。初の監督作品「ナージャの村」は国内外で高い評価を得る。

二〇〇二年には映画「アレクセイと泉」で第五二回ベルリン国際映画祭にてペルリナー新間賞及び国際シネマクラブ賞受賞。

第一二回ロシア・ペテルブルク映画祭でケンタウルス金賞受賞など。

事務局便り

来年は岡村昭彦没後二〇年。

来年、岡村昭彦が亡くなって二〇年の節目を迎えます。定例のAKIHIKOの会では特別な企画はしませんが、『シャッター以前4号』を三月の命日にあわせて発行することを過日の世話人会で決めました。

世話人会では「イラク人質事件も岡村の思想が若いジャーナリストに伝わっていない」「ヴェトナム戦争報道から四〇年、何が変わったのか」などの意見が出されました。

そうしたことを踏まえて、この号には著作集に載っていないむのたけじさんや季羽倭文子さんとの対談記事や金嬉老裁判の公判記録についての原稿の他、後述のテーマでできるだけ大勢の方の原稿を載せたいと思います。もちろん岡村の死後この会に参加された方でも、岡村に関するものであれば何でも結構です。なおこの件でご意見、ご希望などありましたら事務局まで連絡ください。

シャッター以前4号原稿募集

テーマ「岡村昭彦と私」もしくは「岡村昭彦から学んだこと」。締切は今年一〇月末、原稿の長は四〇〇字×一〇枚以内。

HP掲載原稿募集

ホームページ上で掲載する原稿を募集中です。テーマ「岡村昭彦と私」400字～800字、記名、メールまたはFAXでお寄せください。

恒例「AKIHIKOゼミ夏期合宿」案内

今年はお盆明けの八月二日(土)から。今年の楽しみは二つあります。一つはかつてないテーマでのゲスト・講師(ドッグシッター、ドッグセラピスト中山有美さん)の参加です。二つは晩夏の北信濃から菅平高原・タボス牧場散策 軽井沢へのドライブツアーです(マイカーでの参加歓迎)。初日の宿舎は静かな小布施のおなじみのオープンハウスNPO法人「しなのぐらし」(代表の小淵登美子・美宏さんはAKIHIKOの会の会員)。今年も初日は諏訪ゼミや千葉ゼミからの参加もありそうです。二日目はこちらもいまや夏期ゼミのベースキャンプともいえる軽井沢・岩城山荘でのゼミと静寂へと続きます。どなたでも参加できます。希望者は八月五日まで事務局へ。

(費用 一泊 一万六千円、二泊 二万六千円、交通費別)

『シャッター以前1、2、3号の在庫が残り少なくなりました。ご購入の方はお早めに！

HPへのアクセスが五二七七件(七月一日現在)HPを見ての便りや『シャッター以前』

の申し込みもポツポツあります。三月から写真も新しくなりました。今年三月二十八日の第一九回AKIHIKOの会の様子も掲載されています。まだご覧になってない方は覗いてみてください。

通信費の送金先

この二、三年通信費を振り込んでない方は、左記に通信費一〇〇〇円を振り込んでください。

口座番号 「00170 6 615123」
加入者名 「岡村昭彦の会」

岡村昭彦の会『会報』第十四号

発行 東京都江戸川区西小岩五 十一 二十七
戸田徹男方「岡村昭彦の会」事務局
TEL&FAX 03 3657 8380
http://akihiko.kazekusa.jp/
E-mail: akihiko@kazekusa.jp